

研究室のホープ

vol.46



伊達 公恵 さん

お茶の水女子大学大学院
人間文化創成科学研究科
小川研究室
博士後期課程3年 / 学振特別研究員DC2

お母さんで研究者。くるくると手を動かして 糖鎖結合のメカニズム解明に挑む

伊達さんは、5歳と1歳の女の子のお母さんでもある。下のお子さんは、保育園に通いはじめる前は研究室のアイドルだった。「よく連れてきていたので。おんぶしながら実験準備をして、神経を使う実験は寝ている際に(笑)。小川先生が家からお布団を持ってきて、寝かす場所を作ってくださいたりして。皆が理解してください、本当にありがたいです」。今は、ご主人が子供達の送りを担当し、その間に家を片付けて研究室へ。16時には大学を出て、子供のお迎えと夕食の支度。論文を読んだり実験の段取りを考えるのは、通勤中か子供を寝かしつけた後になることが多い。「電車の中では夕食のおかずは何にしようって考えてることもありますね」と笑う伊達さんはあくまでも自然体だ。「娘の服を縫ったり、ケーキを作るのも好き。ものづくりの過程が楽しいですね。実験も

同じで、様々なデータを積み重ねていくと必ず真実が見えてきます。失敗も何らかの事実を示しているから、決して無駄にはなりません」。最近、十二指腸 α -アミラーゼのレセプターを同定。アフィニティクロマトグラフィーの手法で繰り返し分析を行い、候補を絞りこんでいった。学会発表を控えて準備に追われるが、その表情に気負いはない。製薬会社、特許事務所での就業経験を経て研究室に復帰した伊達さんは、意志が強く若い研究者達のお姉さんの存在でもある。「目標は、何か社会に役立つ成果を残すこと。あとは、家族皆が健康でいることですね。そうすれば安心して研究に打ち込める」。伊達さんのようなスタイルは、今後ますます増えていくのかもしれない。第一線の研究者とお母さん、どちらも似合う大らかな笑顔が印象的だった。

小川研究室

お茶の水女子大学理学部化学科・
大学院人間文化創成科学研究科

研究室には、歴代の研究者の写真が並ぶ。戦前より、糖鎖研究で高い実績を上げてきた伝統ある研究室である。小川教授は、細胞外マトリックス分子ピロネクチンに注目し、肝臓再生時の糖鎖による機能調節を詳細に解明。また、膵臓 α -アミラーゼ、膵臓トリプシン等の消化酵素が糖鎖に強い結合性を持つことを発見し、その機能の解明を進めている。「研究領域にも流行があります。しかし、たとえ誰からも見向きもされなくても、自分の発見を大切に展開していくと大切なことに行き着くのです」と小川教授。約20年に及ぶピロネクチンの研究も、最近国際的に注目されるようになり、新たな展開が期待されている。「発見の中こそ、宝がある」。若き研究者達に繰り返し伝えているこの言葉は、教授自身の実感に基づくものだ。メンバーは全員が女性で、研究室には明るくのびやかな空気が漂う。「皆、まだまだ発展途上だけれど、個性的で真摯な情熱にあふれています。若い人達と一緒に仕事ができて幸せですね」。厳しく温かな指導のもと、小さな発見を大切に育ててゆく営みが、今、豊かな実を結びつつある。



小川 温子 教授



研究室の皆さん